

日本記者クラブ会報

複線から複複線型へ

昭和五十九年をふりかえって

多忙な年であった。十五周年記念行事や刊行物のほか、通常業務では国公賓や政財界要人をお招きしての昼食会と記者会見のほか、研究会活動がすっかり定着、公式会見と研究活動という複線型ができあがったわけだ。さらに、森繁久弥さんや石原一子さんを囲む会なども行った。もっと新しいアイデアを集め、複複線型クラブに発展させたいものだ。

日本政府が迎えた国公賓のほとんどすべては当方でお引き受けした。オーストラリア首相、EC委員長、ポルトガル首相、民主カンボジア大統領、ガボン大統領、チュニジア首相など、数のわりには超大国からの大物ゲストが少なかつた。大物の訪日

はずでに一巡したせいだろう。期待の全斗煥韓国大統領の会見は、数少ない日本人記者だけの条件を固執されたので、四年前にワシントンのナショナル・プレスクラブで行ったと同様の昼食会が当方主催でできなかったのは残念だった。

フランスからの賓客、要人が相次いだのも今年の特徴のひとつとなった。日本人のバリへの思いに似たものを、先方がこちらに抱きはじめてのだろうか。アフリカからの国公賓をふくめて、クラブの秋は「フランス語の花ざかり」となった。

それにくらべ中国語のまったく聞かれない年でもあった。鄧、胡、趙の三首脳がすでに登壇をすませ、い

第178号
1984年
12月10日発行
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
プレスセンタービル9F 電話100
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話 五〇三―二七二二(代)

まや中国からは現場実務派万来時代になったのだろうか。

安倍外相が熱をいれ、それぞれと合同会見をしてくれたイラン、イラクの両外相(日時は別)、タイミングのよかつたベトナム、インドネシア、エジプトの外相たちの熱弁ぶり、さらにはシアヌークさんが土曜日というのにひるメシも忘れて、カンボジアばかりか中ソや朝鮮問題にも長広舌をふるつたのも、ニュースソースとしての「東京」や国際政治における日本の地位向上を物語っていた。

藤尾政調会長、高島前駐ソ大使、仁杉国鉄総裁、岡本臨教審会長の昼食会も多くのワーキングプレスを集めた。森繁久弥さんを囲む会は大好評のため、会報で全記録を三連載したほどだった。輸入促進女性ミッションを率いた石原一子さんの訪米前会見も好評で、帰国後に異例のアンコール会見となった。

研究会シリーズの盛況は今年のハイライトでもあった。各省、日銀、大学、企業の一流専門家を招いての勉強会で、日本記者クラブらしい「青中老三結合」の活気がみられた。「84年景見通し」(三回、完了)、「ソ連―その実態と意図」(継続中)、「軍事技術」(九回、完了)、「金融・資本市場の自由化」(五回、完了)、「牛肉オレンジのこれから」(四回、完了)、「ニュービジネス」(継続中)。それぞれに、出先クラブでは聞けない背景や秘話もしばしば紹介されるので、ワーキングプレスの参加増加中だ。

「軍事技術」シリーズは、防衛庁からの五講師等が丁寧に手を入れたあと、日本記者クラブ軍事技術研究会編として原書房から出版された。

十二月一日現在の会員状況

法人会員	一四六社
基本会員	六二六人
個人会員	一、二〇一人
法人・個人賛助会員	六七社 二〇〇人
特別賛助会員	七四人
名誉会員	一六人
計	二二三社 二、一一七人

とっておきの話

ニューヨーク大停電を見た



牧野 拓 司

海を見ていた。五時二十分を過ぎ、人工の火は、いよいよ輝きをます。そのとき、窓の外も内も暗闇に沈んだ。

「オーララ、この世の終わりか、それともベトナムの襲撃か……」

と相手は笑った。ベトナム戦争が日に日に激化していたころである。

私は、すぐにも停電は復旧するだろうと思ひ、その日に送稿する記事のことだけを考えながら、非常階段伝いに一階へ降りた。エレベーターに閉じ込められた人たちを救うために、警備員たちが懐中電灯を持って走り回っている。

△ともかく、オフィスから原稿を送ろう▽
外へ出たら、信号機が止まり、車のヘッドライトが四方から交差点に押し寄せる。停電だと信号が止まるといふ、当たり前のことを初めて知った。△これは、えらい

ことだ。地下鉄にはラッシュ時の乗客が何十万人も閉じ込められているにちがいない▽
マッチの火でダイヤル回す

ロックフェラー・センターのA Pビル五階にあったオフィスに歩いてたどりつき、なんとか手さぐりでドアの鍵を開けたが、騒々しいテレックスの音はなく、真の闇だ。机の引き出しをかき回したら、マッチ箱が一つ出てきた。このときばかりは、煙草をやめたことを悔んだ。△ライターさえあればなあ……▽
テレックスが打てない以上は、国際電話しかない。夕刊早版の締め切りが迫っている。マッチ棒をすって、その明かりでダイヤルを回す。四ケタか五ケタを回し終わらないうちに、マッチが燃え尽きて、私の指先を焦がした。アッチチ……。△電話のダイヤルはこんなに時間がかるものか▽何度もそれを繰り返すうちに、やっと鈍な私の頭にひらめくものがあった

ニュースが突発する瞬間を目撃するということは、長年ジャーナリストをやっても、めったにあるものではない。ことに大きなニュースとなればなおさらである。私には、それらしいことが、たった一度だけあった。

光の海が消えた

一九六五年十一月九日、ニューヨークの大停電である。そのとき、私は、ニューヨークの夜景を最も良く観望できる国連ビルの上のつべん近くにあつて、全市の明かりが二、三度またたきながら、すうっと消えていく瞬間を、偶然見ていたのである。

銀色に輝くウロコ模様のクライスラー・ビル、壮大なエンパイア・ステート・ビル、八角形をした当時のパンナム・ビルの、黒いシルエットだけが満月の空に残った。思わず、わが目を疑ったが、これがまさか史上最大の停電だとは思ひもよらなかつた。
おりから国連総会の開催中で、当時の年中行事であつた中国代表権問題の票決が迫り、各国の賛否の票読みをするために、私は、三階の日本人記者室を抜け出し、めつたに登らない上階の高級職員部の部屋あたりで廊下トンビをしていたのである。ある欧州系の職員と面談をしながら、その人の肩越しに、私は、窓外の見事な光の

た。

「そりだ。ニュースはこれだ、停電だ。国連総会なんか放っておけ」

手元のトランジスタ・ラジオは、刻々、被害状況を伝えている。範囲はニューヨーク市だけでなく、日本全土の面積に近い東北部八州とカナダ二州、三千万の人口を暗黒のなかに包み込んでいた。この地域の都市と文明の機能は死んだも同然だった。

まず懐中電灯を確保しないことにはと、一階下のAP編集局に助けを求め、ドアの外に出たとたん、部屋の奥で電話が鳴るのを聞いた。またマッチをともし、鍵をあけ、暗がりのなかをほうりうにして受話器にたどり着くと、東京本社の交換台の声である。「さすが東京のデスクは、いいカシしてる」

「おお、ニューヨークが出たぞ」
 どういうわけか、編集局長の原四郎さんの大声が耳に入った。局長席にかかっているらしい。社会

部の後輩が出た。私は、暗闇をにらみながら、見聞のありつたけしやべった。そのあとラジオをつかみ、車のヘッドライトと月の光しかない町へ取材に出た。

そのころ、タイム・ライフ・ピルでは、編集総務（チーフ・オブ・コレスポンデント）らが一階ホールに陣取って、取材の指揮に当たり、またニューヨーク・タイムズは、印刷をニュージャージー州のニューワーク・イブニング・ニューズ社に頼んで、記録的に薄い十ページの朝刊をころうじて刷っていた。他のニューヨークの朝刊二紙は、あつさり発行を見送った。

「停電っ子」の後日談も

二、三日して日本の各紙がきてみると、ニューヨーク発の特派員電を載せているのは一、二社だけで、あとはワシントン電でカバーしている。自分のところは、夕刊に国際電話で「暗黒のニューヨーク」と派手に一問一答、朝刊にも「現代文明の黒星―基盤のもろさ

を暴露」と二社面トップにルポ記事が出ている。

振り返って、私の出足がめずらしく早かったのは、あの消える瞬間の夜景を見ていたからだろうと思う。一体、ニューヨーク八百万人のうち何人が、あのととき外の景色を見ていただろうか？ しかも、絵葉書を見るような位置と角度から……。それがなければ、私は、国連の記事にこだわりながら、家路を急ぐことしか考えなかったかもしれない。

ニュースの目撃といえば、それから九か月後、ニューヨーク・タイムズのトルチン記者は、たまたま友人夫妻の出産祝いにマウント・サイナイ病院に出かけて、いつになく赤ちゃんの姿が多いのを見て「あの夜の出来事」を思い出した。そして、各病院の産科を軒並みに当たって、出産件数がどこも平常の倍から三倍にはね上がっていることを発見した。

かくして『停電っ子の大量出生』という、社会、心理学的にも価値の高いスクープが生まれることになる。文明社会が太古の姿に戻った夜、キャンドルライトの下で、都会人は絶望するかわりに、ロマンを楽しんだらしい。

その後、ニューヨークには大きな停電が何度かあったが、あの十三時間余りも続いた大停電からくみ取るべき教訓は尽きない。近ごろ東京・世田谷で起きた通信ケーブル火災事故を見ても、私たちの生活にひそむ盲点は、ふえ続けている。それは、ジャーナリズムの世界にも当てはまるだろう。

……などと考えていると、あの夜のマッチの火の熱さが、シリシリと私の指先によみ返ってくる。

まきの たくじ氏略歴 昭和三年東京都生まれ。五六歳。二十六年読売新聞入社。四十年から四十四年までニューヨーク特派員をつとめ、四十五年解説部長、ついで社会部長、五十年論説委員を経て五十二年退社、著作、評論活動に入る。「素顔の国連」「さらば会社人間」「したたか夫婦学」「熟年語録」などの著書がある。

ガンジー インド首相暗殺

ワーキングプレス

ニューデリー特派員にとって、インディラ・ガンジー首相の身辺の安全は常々最大の関心事であり続けた。この六月、ガンジー首相は、自治権拡大などを要求してシーク教徒過激派が立てこもるインド・パンジャブ州の聖域ゴールデーン・テンブルに軍隊を突入させ、強権でこれを制圧した。暗殺の刃（やいば）が闇の中で磨かれ始めたのはこの時だったろう。「ついにやってしまったか」——これが「ガンジー撃たる」の第一報を耳にした時の思いである。驚きよりも一種の虚脱感があった。

政敵を次々と排除し、彼女なしでは政務も党務も機能しなかったワンウーマン体制。その晩年のガンジー評は決してかんばしいものではなかった。だが、インド政府は即死状態にもかかわらず事件発生から五時間もその死を公式に認めることをためらった。インドは、女帝を失い国家の鼓動までが一瞬止まったかのようだった。「権力の空白」を埋めるための後継首相の選出過程にもその混乱ぶ

りは現れていた。インドでは首相が在任中に死去した場合、長老閣僚が首相代理を務め、その後政権党の党大会で後継総裁（首相）を選出するのが慣例となっている。この方式でいけばラオ内相カムケルジー蔵相が首相代理となるはずで、各国特派員の取材の窓口である「プレス・インフォメーション・ビュロー」（PIB）も両大臣の経歴書をプレス・リリースと

ネール王朝で継承したが

松本照雄

して準備していた。だがふたを開けてみると、閣僚でも党の総裁でもないガンジー首相の長男ラジブ氏が一足跳びに後継者となってしまう。"ネール王朝"の継承とみれば当然のなりゆきではあったが、PIBですら同氏の経歴書を用意していなかったほどだ。このバトンタッチが当のインド人にとってさえ驚きだったのは間違いない。

暗殺事件がもたらした独立後最大の危機を克服し、国を一つにまとめるのは「ネールの血」を受け継ぐラジブ氏しかいないという政界上層部の判断が決め手になったのである。与党の中にさえ権力の世襲制に対する批判の声があったが、大半のインド人はこの首相選出をすんなり受け入れた。「家柄とか血とかいったものに対するインド人特有の「帰巢本能」が働いたもの」（インド人記者）

なかもしれない。インドの社会について「ソフト・ソサエティ」(柔軟社会)という呼び方がある。「ハード・デンプリン」(規律)の社会に住む日本人の目からすると、良い意味での「おおらかさ」、悪い意味での「ルーズさ」がいやでも目につく。ガンジー首相が「身内」の警護員に射殺されたあと、犯人が首相警護隊に採用されるまでの過程が追跡調査されたが、犯人のこのシーク教徒について、事件が起きるまで当局から何らかの注意が払われた形跡はない。

中曽根首相、安倍外相らがガンジー首相が安置されていた旧ネール邸に弔問に向かう際、インド側は警備上車二台で五人までと制限してきた。しかし日本側はそれこそ安全を危うくするものと、インドの申し入れを無視し、車五台にセキユリティを含め十五人が乗って行った。随行した日本大使館員によれば、この時インド側からは一切の「おとがめ」もなかったという。相手が一国の総理ということもあるが、この辺の融通のよさはインドが持つルーズさと混然一体化している。

ガンジー首相暗殺事件にも、インド社会のこの土壌が陰に陽に関連している。インド政治がどのような道を歩むのかという政治部記者的関心はもちろん日々の仕事の主要な部分だ。しかし「あらゆる理解を超えたこと」が起り得るインド社会で、何か一つでも手応えのあるものをつかむには、最後にモノを言うのは社会部記者的嗅覚だろう。

(まつもとてるお 毎日新聞ニューデリー特派員)

グリコ・森永事件

ワーキングプレス

発端が、有名企業の社長誘拐という破天荒なものだった。その後、の異様な展開は、事件を一層複雑怪奇にみせている。

しかし、まどわされてはならない、と思う。どんなに入り組んでみえても、それは犯人らの計略である。事件とは、単純なものだ。

ねらいはカネ、にちがいない。犯人らの勝手な逆恨みもあつたかもしれない。ともかく、通り魔のような動機なき事件や、流しの犯行では絶対でない。そして、この種の事件で、犯人ら

がまったく知らないところをねらうとは、まず考えられない。

ここまで見据えると、なすべきことがはっきりしてくる。この視点が定まらないから、犯人らに振り回されるような事態になっているのだ。

「こんなことをしても、きりがない」。赤い車、タイプライター、帽子、古オーバー……手がかりの一つ一つに設けられた専従捜査班は、大量生産、大量消費の波をもるにかぶって、もうあちこちで音

職人刑事はどこへ行った

をあげている。たしかに、昔とはちがうかもしれない。しかし、かつてダンボール箱の切れ端一枚をたどって、バラバラ殺人を解決したベテラン捜査員は言う。「執念がない。絶対わしの手でつかまえるんや、という気迫がないから、受け持った仕事が本筋ではないという不満ばかり先に立つ」。

だれもが四番バッター、エースになりたがる。八番ライトはいや

榎野 恵 次

なのだ。しかし、アメリカのある社長誘拐事件は、犯人らが交通検問にひっかかって解決した。大阪では、会社の寮に忍び込んだ泥棒が、新婚夫婦殺害の犯人だったことがあるが、最初にそのヒントを思いついたのは、泥棒を調べていた刑事の妻だった。八番ライトがヒーローになった例はいくつもある。

そうした緊張感がないから、事

件の当初、「グリコと関西新空港建設問題は、箱根を越えたらピンとこない」と言われ、大阪でも、舞台が北部に集中していたため、南部の警察署は「北の方は大変やな」とのんびり構えていた。

なぜ、こんなふうになったのか。言いわけはいろいろとあろうし、人の組織にはつきものかもしれないが、一つ思うのは、近代的な組織捜査、と最近よく言われる捜査のあり方に問題がありはしないか、ということだ。

近代的な組織捜査、というあたには大概、職人というらしい、というはもういらぬ、という言葉が添えられる。どこの捜査班にも、この道一筋の古参がいた。班長(警部)の言うことに必ず反対して、捜査方針を何度も再考させる損な役目を黙って引き受けていた。一歩前へ進んだら、捜査にあともどりはきかないことを、よく知っていたのだった。最後まで一線の捜査員であることを、天職と自負していた。

そうした人びとに昇任試験を勧

め、頑固に拒む人は家族から説得させるようになったのは、ここ七、八年、ちょうど近代的な組織捜査が言われ出したころである。警察では、昇任したら職場をかわる。つまり、組織捜査という中には、職人刑事追放の一面があった。

機動捜査隊が全国の府県警に設けられたのも、同じころである。犯罪の広域化、質の変化に対応する新しい捜査手法が求められるのは当然にしても、それを急ぐあまり、捜査の心をおろそかにするようなことはなかったか。

グリコ・森永事件は、捜査の新しい手法を試されているのかもしれない。

(ますの けいじ 読光新聞大阪本社社会部)



手がかりを求めてローラー作戦は続くのだが

クラブゲスト

ワジム ザグラージン ソ連共産党
国際部第一副部長



「出発前チエルネンコ同志に会ってきた。訪日目的は次のように規定された。二国間関係の改善に全力を尽くすように。山を崩すことは一度ではできない。が、作業は始まった。皆、日本料理が気に入っている」。十一月二十五日來日したソ連最高会議議員団（团长クナーエフ 共産党政治局員）のスポークスマンとして会見。グロムイコ外相訪日についても「そんなに遠い将来ではないでしょう」と言明。ソ連の対日政策の戦術的転換を象徴するような内容と雰囲気だった。（十一月三日（水）記者会見 司会 高野洋企画委員 通訳 徳永晴美 出席 七四人）

岡本道雄 臨時教育審議会会長



「有馬さんから頼まれ、反射的に

引き受けましたが、来てみると若い記者が前列で見張っていて、大変な会でした。会長としての初会合での、あいさつをポケットからとり出し、明治維新、戦後の改革に続く、第三の教育改革に当たったの基本認識を語る。区分は容易でないが、科学技術社会や国際化など時代の要請によるものと、一国の教育に不易のものとのを、系列を分けて考える努力が大切とする。が、肝心の不易のものについては、同氏の私見も難解で不鮮明。

【二月二日（金）昼食会 司会 有馬真喜子 企画委員 出席 五〇人】

前川春雄 日本銀行総裁



五十四年総裁就任の翌年から、毎年、クラブゲストとして登場してくれた、前川総裁のいわばさよなら昼食会。例によって内外の金融・経済情勢についての手際よいレクチャーの後、質疑へ。最後の質問は「五年を通じ一番つらかった局面と逆に満足の局面は？」。どんな事態、難問にも困った様子を見せない前川さんも、思わずウーン。「やめる前に必ずきかれるとは思ったが、こんなに早いとは？」。早さの勝負ではプレスに手を挙げて

みせた総裁を、全員が温い拍手で送った。【二月五日（月）昼食会 司会 広瀬一郎企画委員 出席 六六人】

ロバート ローザ ブルッキングス研究所会長



来年の米国経済は「十月からの新年度には二千億ドルを超えるかもしれない財政赤字を前に、大統領と議会が遠からず政治的妥協をはかり、臨時的に二百億ドル程度の増税と同規模の歳出カットが行われ、三％台の実質成長」。国際通貨安定のためのローザ構想や中曽根ポンドの命名者としても著名。財務次官当時、わが国のIMF八条国移行、十か国蔵相会議、OECD第三作業部会加入に尽くしたとし、このほど勲一等瑞宝章受章。（二月一日（月）昼食会 司会 本島宏企画委員 通訳 池田薫 出席 五四人）

小倉昌男 ヤマト運輸社長



ご存じの手ぶらでゴルフの黒ネコヤマトの社長さん。商取引と関係のない、不定期で散発的な生活関連小口輸送を、宅急便

として開発。従来からの国鉄小荷物と一般郵便小包を限りなく駆逐、五十一年度千七百万個の扱いが五十八年度一億九百万個。「世の中確かに変わっている。大量生産、大量消費、大量輸送の時代から生活者の時代へ」。【二月一日（月）研究会（ニュービジネス）（Ⅲ） 司会 平田真己企画委員 出席 六一人】

石原一子 高島屋常務取締役



「女は本来買い物好きなので、みんな意欲的に駆けまわりました。十月九日～二十四日まで訪米した、輸入促進女性ミッション团长としての、アンコール会見。出発前の会見同様、全力投球している人間の、正直さそう快さが印象的だった。（二月二七日（火）記者会見 司会 有馬真喜子企画委員 出席 三六人）

D・L・ドーガン 米國務省国際情報通信政策調整官

そのままニュースキャスターにしてもいいような容姿と明せさき。冒頭「報道の自由を確保し維持するのも、私の責務の一つ」とニクイ。【二月三〇日（金）記者会見 司会 藤川麗也企画委員 通訳 中野和子 出席 五八人】



スタジオ訪問

ONE WAY

CBCニュースワイド
中部日本放送

十一月十五日木曜日。低気圧が本州南岸に進み、ほぼ全国的に久々の雨となった。名古屋地方も朝から雨模様。

午後六時、中部日本放送の一階。通りに面して作られた、ガラス張りのオープンスタイルのスタジオでは「CBCニュースワイド」がオンエア。傘をさし、立ち止まって見物する通行人もいる。

最初のトピックはこの雨。恵みの雨と喜ぶ農家と、七五三の晴れ着の裾を気にする家族連れの表情が映し出される。

六時からの三十分ローカル・ワイドニュースは、全国に先駆けてのスタートだった。当初、放送日は月金であったが、翌年から土曜が加わり、昨年からは日曜も。現在、週七日態勢、これも大きな特徴となっている。

「十年前の六時台といえば子供向けのマンガ番組が主体。そこにニュースをぶつけるわけですから、とにかく大変でした」。水谷満テレビニュース部長はスタート時の苦勞を語る。「しか

も、ヒナ形になるような番組がどこにもなかったわけです。文字通り試行錯誤の十年間でした」と言うのは、ずっとメインキャスターを務めている日比英一さん。それまでラジオの音楽番組を担当していた、日比さんにとって既存のキャスターのイメージを脱するというのが、ひとつのポイントだったようだ。

もうひとつの特徴は、毎回活躍する中継車。「その時々々の生の表情を伝えるために必ず中継車を出しています」と番組スタート時から制作に関わってきた、テレ

中継車とヘリコプターで
臨場感を茶の間へ

ビニュース部長職の菅生照さん。最近、ランドクルーザーを改造したFPU車（取材中継車）も購入した。小型ながらも撮影、編集、マイクロウェーブ送信の機能を持つ新兵器。機動力が一層増した。現在、大小四台の中継車と一機のヘリコプターが常時、出動できる状態にある。

この機動力が遺憾なく発揮されたのが八年前の長良川の堤防決壊、そして九月十三日の王滝村の土石流取材。連日の雨のため河川の水かさが増して

いたところへ、長良川が危ないようだという情報が入った。すぐにヘリコプターを飛ばした。川沿いにカメラを回していたところ、突然、堤防が決壊。みるみるうちに輪中（水災防止のため一定区域を堤防で囲んだもの）の中へ水が流れ込んでいく。その一部始終をカメラはとらえたのだという。

王滝村の場合も、情報を受けヘリコプターが飛んだ。悪天候のため東からのルートをあきらめ、西から向かったところ十二時十分、大規模な土石流の発生に出くわした。カメラ

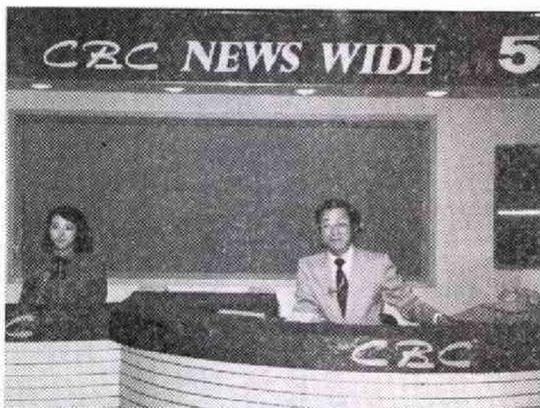
マンも、それが何なのかよく分からないままに撮影したという。「非常にラッキーでした」と水谷さん。

「もちろん、パイロット、カメラマン、デスクの日頃の努力がなければできない仕事ですがね」の言葉に菅生さんもうなずく。この二つの映像は学術的にも貴重な資料となっている。

午後四時を過ぎる頃から、それまで静かだったデスク周辺に人が増えはじめ、ジワジワと活気が満ち始める。菅生さんが追加取材の指示を出し、自らも電話で取材に当たる。相手の耳が遠いのか、大声で五分ほど話し受話器を置く。同僚の

一人が「イヤー、久々に本格的な名古屋弁を聞いたなァ」とひやかす。まだ、余裕がある。

本番三十分前。デスクのまわりに日比キャスター、女性アナウンサー、スタッフが集まる。最終チェックだ。テーブル上の小型テレビに編集済みのビデオが流される。この日の項目は十個、日比さんが原稿を読みあげ、項目別に時間と原稿内容が確認されていく。同じ頃、スタジオではカーテンが開けられ、照明が入り、カメラリハーサルが行われている。そして、本番十五秒前。副調整室に緊張がみなぎり、カウントを読む声がひびく。テーマ曲が流れ番組が始まった。（河野 聡）



日比英一キャスター（右）と吉木淑恵アナウンサー

プロフィール

十二月一日付入会の個人D会員、法人賛助
会員の方々です。

日本記者クラブ会報 (昭和59年) 索引

一六七号

- 1 前途風雨強かるべし (新井 明)
- 2 日本テレビが百万円 記者クラブ賞基金に
- 3 『ワーキングプレス』
- 4 総理の師走選挙決意まで (共同 新名 瑛)
- 5 レーガン訪問後の韓国 (NHK 中谷和男)
- 6 野坂香の見た新潟三区 (新潟日報 小田敏三)
- 7 『新春随想』 夢は世紀のハシゴ酒 (若佐直喜)
- 8 『とっておきの話』
- 9 自殺した作家のマタラ元で (村尾清一)
- 10 『先月のクラブゲスト』
- 11 藤木平八郎軍事評論家 稲山嘉寛経団連会長 西村功 住友銀行常務取締役 七党連統記者会見
- 12 『写真回廊』 (共同 香丸 宏)
- 12 (開春の会) 第二回大野杯・木島宏四段が優勝
- 12 新企画『写真回廊』始まる
- 12 テレビ大阪が入会

一六八号

- 1 原、高田両氏を名誉会員にノ二人目の会員
- 2 新年互礼会/第11回予想アンケートの結果
- 4 『とっておきの話』
- 4 ケネディの死んだ日 (吉村克巳)
- 6 『ワーキングプレス』
- 6 レーガン・趙紫陽会談 (時事 山本二郎)
- 7 東証ダウ一万円突破 (日経 黒川 勲)
- 8 北陸から五人の閣僚 (北国 山本 彬)
- 9 正月スポーツ花盛り (東京 伊藤 悠)
- 10 『先月のクラブゲスト』
- 10 鈴木淑天日銀金融研究所副所長 中村孝士東経大教授

一六九号

- 1 竹中一雄国民経済研究協会会長 関川栄一郎航空評論家 野坂昭如氏 中曾根康弘首相 ガレック仏首相付 計画担当政務次官 後藤田正晴行管庁長官
- 11 クラブ功労者の名誉会員推挙を決定(第72回理事会)
- 11 原、高田両氏を名誉会員に (第22回臨時総会)
- 15 『写真回廊』 (時事 山口良吉)
- 16 『福引』 景品提供社
- 1 月額二千万を超える見込み一五十九年度予算
- 2 パキスタンは日本ブーム (笠置正明)
- 4 『とっておきの話』
- 4 日ソ交渉大詰めの上合議 (酒井新二)
- 6 『ワーキングプレス』
- 6 チェルネンコ新書記長 (毎日 江川 昌)
- 7 ベイルート支局 (共同 佐々木 伸)
- 8 サラエボ・オリンピック (NHK 二階宗人)
- 9 『雪国』 東京 (読光 吉田伸弥)
- 10 動き出したサラ金規制法 (サンケイ 立辺純太)
- 11 『先月のクラブゲスト』
- 11 田川誠一自治相 小和田恒外務省条約局長 ホーク豪州首相 セービン ショージフアントン大教授 山本晋也監査 西元徹也防衛庁陸幕運用課長 キムヒイ スラエル外務次官
- 12 森恭三さんを悼む (江崎 清)
- 14 研究会「金融自由化問題」紹介 (鈴木企画委員)
- 15 『写真回廊』 (毎日 鈴木久俊)
- 1 新事務局長に中村實氏/五十九年度予算が成立
- 1 『とっておきの話』

一七〇号

- 1 新事務局長に中村實氏/五十九年度予算が成立
- 1 『とっておきの話』

行方不明の特派員を求めて (若松信重)

- 2 『ワーキングプレス』
- 4 米大統領予備選 (朝日 原 康)
- 5 三浦・ロス狂奏曲 (共同 石川 聰)
- 6 予算案衆院通過 (東京 明石 勲)
- 7 『スタジオ訪問』
- 7 (NTV・久米宏のテレビスタランブル)
- 8 五十九年度予算 (第23回臨時総会)
- 9 五十八年度事業報告
- 11 『先月のクラブゲスト』
- 11 榊原英資国際金融情報センター総務部長 竹内二郎東京銀行参与 ベグス米航空宇宙局長官 春日一幸民社党顧問 田中六助自民党幹事長 チサノ モザンビール外相 スベツァーノ ガネット社副社長 井上忠雄防衛研修所所員
- 15 『写真回廊』 (サンケイ 石黒 潔)
- 16 新企画『スタジオ訪問』始まる
- 1 増田、牛山両氏にクラブ賞
- 2 『とっておきの話』
- 2 ベトナムで死んだ日本兵 (上田健一)
- 4 『ワーキングプレス』
- 4 日米農産物交渉 (日経 金子弘道)
- 5 V AN戦争のあとさき (日刊工業 岡村信克)
- 6 グリコ社長誘拐事件 (神戸 朝日義治)
- 7 トランスボンダの誕生 (梅本 昭)
- 8 『スタジオ訪問』 (テレビ朝日・CNNニュース)
- 9 『先月のクラブゲスト』
- 9 新谷正三郵信託銀行専務取締役 ベラヤチ イラン外相 安倍晋太郎外相 キプリアESCAP事務局長
- 9 ターンハイムBMW社長 ラムズドルフ西独経済相
- 9 スミスGM会長 立花正照軍事問題評論家 叶芳和国民経済研究協会理事長 山口巖全国農協中央会専務理事
- 9 事 カワリ カタール情報相兼首長付官房長 ハウ英

一七二号

- 1 増田、牛山両氏にクラブ賞
- 2 『とっておきの話』
- 2 ベトナムで死んだ日本兵 (上田健一)
- 4 『ワーキングプレス』
- 4 日米農産物交渉 (日経 金子弘道)
- 5 V AN戦争のあとさき (日刊工業 岡村信克)
- 6 グリコ社長誘拐事件 (神戸 朝日義治)
- 7 トランスボンダの誕生 (梅本 昭)
- 8 『スタジオ訪問』 (テレビ朝日・CNNニュース)
- 9 『先月のクラブゲスト』
- 9 新谷正三郵信託銀行専務取締役 ベラヤチ イラン外相 安倍晋太郎外相 キプリアESCAP事務局長
- 9 ターンハイムBMW社長 ラムズドルフ西独経済相
- 9 スミスGM会長 立花正照軍事問題評論家 叶芳和国民経済研究協会理事長 山口巖全国農協中央会専務理事
- 9 事 カワリ カタール情報相兼首長付官房長 ハウ英

国外相 発表の場としてのクラブ

- 10 『平和を脅かすもの』 試写会
- 10 (ゴルフの会) 第三回優勝杯取り切り戦で本田会員が優勝
- 11 遠米の同僚たち トインビー博士のお孫さんも
- 14 『写真回廊』 (AP 笹原浩一)
- 15 昭和五十八年度会員異動
- 16 テレビ西日本が入会
- 1 世界一のナンショナル・プレスクラブに (中村 實)
- 2 『59年度日本記者クラブ賞を受賞して』
- 3 現代の記録者として (牛山純一)
- 4 事務局長を辞すにあたって (笠置正明)
- 6 『とっておきの話』
- 6 二・一ゼネスト中止と占領政策 (樋口弘其)
- 8 『ワーキングプレス』
- 8 七七日間会期延長 (共同 新名 瑛)
- 9 片肺オリンピック (読光 牛木素吉郎)
- 10 比国民議会選挙 (朝日 高野和彦)
- 11 香港の復帰問題 (時事 西田雄一郎)
- 12 『大鳴門橋』 連結 (徳島 杉田車式)
- 13 『スタジオ訪問』
- 14 (NHK・きょうのスポーツとニュース)
- 14 五十九年度収支計算書、財産目録 (第24回通常総会)
- 15 春季会員懇親会
- 16 『先月のクラブゲスト』
- 16 トルンEC委員長 並木正吉食糧農業政策研究センター副理事長 加藤敏一自民党総合農政調査会副会長
- 16 相田雪雄野村投資顧問社長 アニエリ フィアット自動車会長 岩田昌征千葉大学教授 清水幾太郎元学習院大学教授 上原祥雄防衛庁技術研究本部第三研究所第一部長 安倍晋太郎外相 アジズ イラク外相 ガ

『ザ・ウイ・サウジアラビア外務省アジア局長 モフタル インドネシア外相 アル・バズリー イラク国営通信総裁 藤尾正行自民党政調会長
酒類の価格改定、会員の著書、寄贈書の取り扱いについて(第9回施設運営委)
会員名簿を九月に発行(第82回資格委)
酒類の新価格表
『写真回廊』(日経 藤田 彰)
宮武さん九階の責任者に
事務局の異動―村上真樹子紹介

一七二号

創立十五周年記念に『ゲストサイン集』を刊行
『とっておきの話』
苦しかった一年―特派員の逮捕と殉職(小島章伸) 2
『ワーキングプレス』
ロンドンサミット(共同 入来隆重建) 4
健保法改正案(サンケイ 石橋成彰) 5
テヘラン特派員(中田 迫田勝敏) 6
『スタジオ訪問』(テレビ東京・星からの国際情報) 7
『先月のクラブゲスト』
シアスーク 民主カンボジア大統領 市川真紀夫石油評論家 大場智海大蔵省財務官 ソアレス ホルトガ
ル首相 仁杉巖国鉄総裁 簡井良三防衛庁技術研究本
部企画部長 波多野敏雄外務省中近東アフリカ局長
創立十五周年記念事業について(「ルールブック」の
改定を承認)日本記者クラブ賞推薦委員会委員長を内
田健三氏に(第78回理事会) 10
『写真回廊』(山陽新 山西哲男) 11
(囲碁の会)藤沢一就三段を迎え夏季大会
夏のレストラン 土曜の夜は休みます 12

一七四号

『とっておきの話』
阿陸下迎えて戦後初の新聞展覧会(江尻 進) 2
東欧四か国取材駆け歩き記(石丸和人) 4
『ワーキングプレス』
全斗煥大統領の訪日(毎日 重村智計) 6
テレリンビクタ(NHK 牧野 昌) 7
ささそう三陸鉄道(岩手日報 下田 勉) 8
『スタジオ訪問』
(フジTV・ニュースレポート6・00)
『先月のクラブゲスト』
塩野七生評論家 ファビウス仏産業・研究相 吉富勝
経企庁経済研究所次長 正村史朗総合科学研究所所長
森繁久弥氏 ムボウ ニネスコ事務局長 バン・レネ
『P.O.E.C.D.事務局長 新聞欽哉日本国際問題研究所
理事長
『写真回廊』(栗田 格) 15
新聞さんタラバ前史』を語る 16

一七五号

『ルール・ブック』を改訂
『とっておきの話』
クリシエナ・メノン会見記(斎藤吉史) 2
『ワーキングプレス』
韓国米緊急輸入(日経 金子弘道) 4
女の五輪(朝日 越村佳代子) 5
森繁久弥さんを囲む会から(Ⅰ)
『スタジオ訪問』(TBS・報道特集) 9
『先月のクラブゲスト』
ガリー エジプト外務担当相 高島益郎前駐ソ大使
安倍晋太郎外相 ムーア ニュージールランド海外貿易
マーケティング相
『写真回廊』(朝日 馬田広直) 11

一七六号

『とっておきの話』
ロンドン特派員とドア教授のこと(枝松茂之) 2
『ワーキングプレス』
動き出した臨教審(NHK 影山日出夫) 4
京都・大阪連続殺人事件(京都新 清原邦雄) 5
全斗煥大統領初訪日(東亜日報 韓甲洙) 6
森繁久弥さんを囲む会から(Ⅱ)
『スタジオ訪問』
(文化放送・ワールドホットライン)
『先月のクラブゲスト』
飯田亮セコム会長 メルマズ仏国民議会議員 ポンゴ
ガボン大統領 石橋正嗣社会党委員長 ミラー ロイ
ズ会長 石原一子対米輸入促進女性ミッション団長
マスコミ関連企業の入会(第85回資格委)
『写真回廊』(東京 田中紀男) 15

一七七号

『言論活性化に全力を』(新井理事長が創立十五周年
パーティーであいさつ)
『写真特集』クラブ十五歳の誕生日
初代事務局長前田雄二氏死去
いつも私の前を歩いてきた前田さん(高田秀二) 4
『とっておきの話』
池田政次とL.T.貿易(中村泰次) 6
『ワーキングプレス』
自民党総裁選び(共同 松崎 稔) 8
テレビ討論の舞台裏(朝日 小田隆裕) 9
森繁久弥さんを囲む会から(Ⅲ)
『先月のクラブゲスト』
グエン・コ・タタ ベトナム外相 ボーランド ジャ
ーナリスト代表 クレブソン仏産業再編・貿易相
ライスキー前オーストリア首相 ムザリ チュニジア
首相 大森康彦日本ソフトバンク社長 エルナンデス
メキシコ商工振興相
『スタジオ訪問』(毎日放送・MBSナウ) 18

一七八号

『写真回廊』(読光 北川敏孝) 19
昭和五十九年をふりかえって
『とっておきの話』
ニューヨーク大停電を見た(牧野拓司) 2
『ワーキングプレス』
ガンジー インド首相暗殺(毎日 松本照雄) 4
グリコ・森永事件(読光 樹野恵次) 5
『クラブゲスト』
ザクラーソン ソ連共産党国際部第一副部長 岡本道
雄臨教審会長 前川春雄日銀総裁 ローザ ブルッキ
ングス研究所会長 小倉昌男ヤマト運輸社長 石原一
子高島屋常務 ドーガン米商務省国際情報通信政策調
整官
『スタジオ訪問』(CBC・ニュースワイド) 7
『写真回廊』(道新 菅原 淳) 11

クラブ会報講演記録版(臨時増刊)

二月二十九日発行 第二次大戦後の戦間機の変遷(藤
尾保防衛庁航空幕僚監部技術部長) 新たな自信を
得るか世界経済(鈴木淑夫日本銀行金融研究所副所長)
四月二十五日発行 急速に進展する自由化(竹内一郎
東京銀行参与) 米ソ潜水艦の現況(藤木平八郎軍事
問題評論家) 六月八日発行 輸出自主規制は段階的
解消を(ロジャースミスSGM会長) 化学兵器途
上国(拡散の危険性も)井上忠雄防衛研究所員
七月二十日発行 自由化に耐えられる日本農業の育成
を(叶芳和国民経済研究協会理事長) 戦車とその運
用思想(西元徹也防衛庁陸幕運用課長) 八月二十四
日発行 ソ連・東欧の社会主義をみる視角(岩田昌征
千葉大学教授) 十二月五日発行 体験的ニューピシ
ネス論(飯田亮セコム会長)

写真回廊



写真 菅原 淳 (北海道新聞 浦河支局)

早く海に帰れ!

シャチが「座礁」した。えりも岬からの寒風が波しぶきを叩きつける北海道・浦河の海岸に、海の猛獣シャチは、ホコを立てたままごう然と構えていた。

海に帰ってもらおう、と町の男たちは押し戻そうとするのだが、体長四メートルもある巨体はビクともしない。押してダメなら引いてみな、町長の陣頭指揮でクレーン車の吊り上げ作戦も行われたが、いずれも失敗、町民たちは困り果てた。

折から浦河町は放流したサケの回帰シーズンを迎えていた。また後背地の日高種畜牧場では、競走馬サラブレッドの若駒がとびはねている繁忙期だった。シャチが死んだら厄介な粗大ゴミとなる。喜んで迎えるのは名古屋城ぐらいだろう。

早く海に帰れ! 地場産業を守ろうと男たちは懸命だった。この画面の戦う姿に、ふと胸をよぎるものがあるとすれば「専守防衛」ってこんなものかなア、という感慨だろう。

さて、後日譚。二日後に息絶えたシャチは解体業者に運び去られ、養殖ミンクのエサになったという。やれやれ。

(文・山崎英祐会員)

第117回企画委員会 (昭和59年11月6日(火)
日本記者クラブ大会議室)

司会をした各委員による行事報告後、十二月のクラブ行事とゲスト選考について協議した。

明年一月十八日(金)の新年互礼会の席上実施する、「昭和60年予想アンケート」の出題割り当てを決めた。

出席 藤村委員長。本島、友田、広瀬、有賀、石丸、高野、水野、尾崎、武藤、河野の各委員。

第56回会報委員会 (昭和59年11月7日(水)
日本記者クラブ小会議室)

十二月号、新年号の編集について協議した。

出席 深谷委員長。桂、井出、斎藤の各委員。

第87回会員資格委員会 (昭和59年11月9日(金)
日本記者クラブ小会議室)

十二月一日付の入退会を審議し、理事会へ答申した。

出席 渡辺委員長。中川、加藤、山崎、玉井、山同、莖邑、長竹の各委員。

第12回施設運営委員会 (昭和59年11月27日(火)
日本記者クラブ小会議室)

明年一月以降の貸室利用について検討した後、レストランメニューの改定について協議した。

出席 小林委員長。高橋、和田、広瀬、宮地の各委員。

ラウンジのブースから

国際電話ができます

ラウンジ内の電話ブース(2番)に、国際通話兼用カード公衆電話が設置されました。ダイヤル直通で国際電話がかかります。カードはプレスセンター一階

の売店で販売しております。

年末恒例の大軒杯争奪囲碁大会

次の要領で開催されます。

◇日時 十二月二十二日(土)午後一時から

◇場所 日本記者クラブ会議室

◇会費 二千元

◇表彰 総合優勝者・各組優勝者(参加賞あり)

参加ご希望の方は十二月十五日までに事務局へお申し込みください。

明年の『写真回廊』短文執筆者決まる

本年一月号から開始した『写真回廊』は、各社写真部の力作と短文執筆者の皆さんの練達の筆が相まって、好評のうちに一年を経過しました。明年一月からは、これまでの中沢道明、三樹精吉、山崎英祐の三会員にかわり、山本武、増田れい子、古谷綱正の三会員に短文を担当していただきます。引き続きご愛読ください。

訂正 177号7面「とっておきの話」に使用した、

高崎達之助、廖承志の握手する写真の説明中にある「後ろ前列中央高崎、周両氏」を「後ろ中央岡崎嘉平太、周恩来首相」と訂正します。

計報 田村祐造会員(個人D)が十一月十五日脳コウソクのため、山谷親平会員(個人D)が十一月二十八日急性じん不全のため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

十二月の行事

6日(木) 正午～午後2時 佐々木良作民社党委員長昼食会 クラブ宴会場

13日(木) 午後2時30分～4時 プリマコフソ連東洋学研究所所長記者会見 クラブ

会見室

21日(金) 正午～午後2時 竹入義勝公明党委員
長昼食会 クラブ宴会場

年末年始のお知らせ

クラブルームは十二月二十九日(土)正午で閉室し、新年は一月五日(土)午前10時から平常通り開室いたします。ただし、レストランは十二月二十八日(金)夜の部まで営業し、一月四日まで休業いたします。

恒例の新年互礼会員懇親会は、一月十八日(金)午後六時、プレスセンターホールで行われます。会員の皆さま、よいお年をお迎えください。

事務局一同

会報委員長 深谷憲一

委員 桂敬一 井出新六 斎藤吉史 安延久夫
連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三二二七二一